The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	菊と紅葉の表現史 ： 一条朝前後の好尚とその背景
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	語文. 2016, 105, p. 28-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70971
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

菊と紅葉の表現史

――一条朝前後の好尚とその背景――

瓦井裕子

はじめに

ある表現が歌人同士の交友を通して共有されることは、各時代において行われていた。『古今和歌集』撰者たちの歌に共通の表現が見られることについて、片桐洋一氏は、

どれがどれによったということではなく、一人がおもしろい歌語を使ったり目を奪うような巧みな表現をすると、すぐにそれが共通のものとなり、その表現を利用し、その歌と重ね合わせたおもしろみをねらうのである。[1]

と説く。個論も積み重ねられつつある。[2]

従来、表現の共有という問題は、特殊な歌ことばなどを取り上げて、歌を中心に論じられてきた。しかし、ある表現に対する表現者の興味は、はたして歌だけに留まるのであろうか。歌での使用に限定されない表現においては、歌以外の文学、またさらに広範な文化にまで、その好尚の及ぶ可能性がある。

本稿は、歌以外の文学や文化に浸透した例として、菊と紅葉を取り合わせる表現に着目する。表現史を辿り、それが特定の時代・特定の集団にしか見られないことを明らかにした上で、一つの表現が盛衰してゆく様相に迫りたい。漢詩や物語を含めた文学的環境を検証することにより、菊と紅葉の取り合わせがある時代においてどう受容され、伝播していったのかを論じるものである。

一、十世紀後半までの菊と紅葉

紅葉に比して菊の用例は圧倒的に少なく、古くから親しまれた紅葉と、外来種である菊への意識の差は顕著である。『懐風藻』には菊の詩が採られるものの、同時代の『万葉集』は菊の歌を一首も持たず、和文全体での菊受容の遅れが想定される。現存する菊詠の初例は、延暦十六年の桓武天皇御製で、以降菊は徐々に和文へと根付いていった。

延喜七年九月十日に行われた宇多法皇大堰川御幸で、菊と紅葉

は初めて句題ならびに歌題として同時に登場する。「紅葉落」「菊花残」を含む九つの題が与えられ[3]、貫之の和歌序には「もみぢの葉のあらしにちりて、もらぬ雨ときこえ、菊の花の岸にのこれるを、空なる星とおどろき[4]」という文言が見える。しかしながら、菊と紅葉とを一体的に賞玩しようという姿勢はいまだ見られず、題の羅列の域を出るものではなかった。

散文で初めてこの取り合わせが見られるのは『伊勢物語』八十一段[5]である。

むかし、左のおほいまうちぎみいまそがりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて、すみたまひけり。十月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、もみぢのちぐさに見ゆるをり、親王たちおはしまさせて、夜ひと夜、酒飲みし遊びて、夜明けもてゆくほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。[6]　（182～183）

ここでは、「十月のつごもりがた」という時期に関わって菊と紅葉が取り合わせられる。当該章段の主旨は塩竈を模した河原院を称賛する翌朝にあり、菊と紅葉が景を構成しているとは言い難いが、両者一体となり美的表現として機能していることは注目に値しよう。

この時期、現存する歌の中で、初めて菊と紅葉が取り合わせられた。『躬恒集』は、行く秋を惜しむ遊覧で詠まれた歌群の中に、以下の歌を載せる。

（晩秋遊覧同賦秋景引閑行）

紅葉のみ惜しくはあらず菊の花　　左衛門尉
時雨のさきに折りてかざゝむ　　躬恒[7]

（『躬恒集』・Ⅳ・344）

秋を惜しむ心を紅葉に託して皆が歌を詠む中、左衛門尉は「紅葉ばかりが惜しいのではない、菊の花にも心を寄せているのだ」と詠む。躬恒はこれに対し、「時雨が菊を変色させる前に挿頭としたい」と応じた。一同が紅葉を通して秋を惜しむ中、紅葉に比肩するものとして菊の美を歌った左衛門尉の発想は、斬新なものであった。だが、この場で他には誰も菊を詠もうとせず、その後も影響を及ぼすには至っていない。

和歌史において、次に菊と紅葉が取り合わせられるのは、十世紀後半、高明と元輔の贈答歌である。

大納言（稿者注・源高明）、菊を惜しむ夜紅葉をゝこせて、詠みてはべる

夜もすがら残れる菊を惜しむとも紅葉の色を忘れざらなん

返し、元輔

忘れめや深き紅葉の蔭ならでうつろふ菊のあらばこそあらめ

（『元輔集』・Ⅰ・17・18）

高明は残菊の宴で紅葉を元輔に贈り、「菊を惜しんでいるからといって、紅葉の色を忘れないでほしい」と、『躬恒集』左衛門尉の詠歌と同じ趣向で詠みかける。これに対し元輔は、「深く色づいた紅葉のない所で菊が移ろうならともかく、どうして紅葉を忘れましょうか（あなたのご恩を忘れることはありません）」と返

す。「菊を惜しむ夜」はおそらく残菊を愛でる宴席であろう。菊を惜しむ場で、惜しむ心情との関連において紅葉が取り上げられる。

この時代、菊と紅葉の取り合わせへの興味の萌芽は、すでに生まれていた。それは漢詩に胚胎する。『千載佳句』暮秋の部には、菊・紅葉の三句が採られた。

黄花助興方携酒　紅葉添愁正満階　白（198）

晩秋紅葉題詩遍　秋待黄花醸酒濃　許渾（208）

雨匂紫菊叢々色　風弄紅蕉葉々声　杜荀鶴（211）[8]

『全唐詩』は菊・紅葉の取り合わせ表現を数例しか持たないものの、撰者大江維時はその中から三つを採用し、この表現に対する強い関心を示した。

現存する和製漢詩の中で、最初に菊と紅葉が結びつけられた[9]のも、十世紀後半から末頃のことである。

或流為蜀江。紅葉浮而濯錦。或潟為鄰谷。黄菊映而沈金。[10]

（『本朝文粋』・巻十・316・慶滋保胤・冬日於極楽寺禅房同賦落葉声如雨）

籬菊紫摧迎日冷。岸楓紅灑任波流。[11]

（『江吏部集』・巻下・暮秋同賦草木揺落応教）

江楓葉落沈淪久。籬菊花遅採擢空。

（『江吏部集』・巻下・秋夜守庚申同賦蘭以香為貫）

澗水葉泛。如濯錦於紅鱗。紫籬菊残。似投玉於山鵲。

（『本朝文粋』・巻十・283・紀斉名・七言晩秋於禅林寺上方眺望）

『千載佳句』所収句がそうであったように、漢詩では、白菊の帯びる紫または黄菊と紅葉の紅が鮮やかに対比される。紫・黄と紅といった鮮明な色彩同士の対比は、和歌よりも漢詩の得意とするところであり、[12]菊と紅葉の取り合わせは、色彩への興味を伴いながら、この頃漢詩を中心に展開したらしい。

高明と元輔の「紅葉の色」「うつろふ菊」に焦点を当てた贈答も、このような漢詩の状況を背景に行われたのであろう。だが、これもまた和歌史の中では単発的な出来事であった。漢詩における菊と紅葉の取り合わせは、『本朝無題詩』に至ってますます数を増すように、継続的に行われたことが推測できるものの、和歌史からは再び姿を消してしまう。

二、和歌における流行

和歌の状況が大きく変化したのは一条朝前後であった。菊と紅葉の取り合わせが、急速に詠まれるようになるのである。しかも、その表現の担い手は一変し、悉く女房たちによって占められる。以下に、その全例をおおよその推定年次に従って挙げた。

最も早いと思われる例は『大斎院前の御集』である。

同じころ、御前の紅葉いとおもしろきを、口惜しう人も参らで見ぬ事など言ひて

進

憂き里の菊みる人もなき宿の紅葉や夜の錦なるらむ

菊の傍らにあればなるべし　馬

濃さまさる紅葉の色もあるものを少しうつろへ白菊の花

（『大斎院前の御集』・186・187）

「菊を見る人もいない里の紅葉は甲斐のないものか」という贈歌に対し、馬内侍は「深さをます紅葉の色もあるのだから今少し移ろえ、白菊の花よ」と返す。この歌には、菊と紅葉の取り合わせ、とりわけ色づきわたった紅葉と紫に移ろう菊とを同時に賞美したいという色彩的対照性への強い嗜好が表れている。これは漢詩において夙に見られたものであった。さらに、この歌は色彩美に加え、冬の霜枯れを前に、あとわずかで散り、枯れるしかない景物を共に鑑賞したいという願望が表れている。

馬内侍は、菊・紅葉の歌をもう一首残す。

いたく荒れたる人の家に、紅葉散りて、人もおさ〳〵なきに菊おもしろう立てり、女ながめたるに

木枯らしのしける紅葉にあと絶て人も見えこぬ宿の白菊

（『馬内侍集』・185）

これは屏風歌であろう。陋屋を訪ねる人もいない様を、散り敷いた紅葉と白菊によって表現する。

赤染衛門は盛りの紅葉を見、初冬の庭から特に菊と紅葉を取り上げて詠む。

十月朔日ごろ、かやう（ママ）院殿の文殿にて、紅葉の盛りなりし見て

秋ゆけどのどけき宿の紅葉かな風だに荒く吹かぬなるべし

おきてゐる菊の葉わけの露の上に黄金の波の影ぞうつれる

（『赤染衛門集』・Ⅱ・105・106）

また、『赤染衛門集』にもう一例ある。

十月に紅葉のいと濃き、うつろひたる菊とを包みて、人

秋果て、今はかぎりの紅葉とはうつろふ菊といづれまされり

返し

もみぢ葉の散るをも思ふ菊ならで見るべき花のなきも嘆かし

（『赤染衛門集』・Ⅰ・252・253）

秋の名残を留める「かぎりの紅葉」「うつろふ菊」の美の優劣が、赤染衛門に問われる。湯浅幸代氏は、これを「春秋優劣論にも似た王朝の美意識」[13]と評した。赤染衛門は、十月という時節に合った美を両者に認め、「どちらも捨てがたい」と応じ、菊を惜しむ理由として、その後に咲く花はないからだとする。

赤染衛門の返歌は、元稹の高名な詩句「不是花中偏愛菊　此花開後更無花」を引く。元稹の詩を踏まえた歌は、

岩間より生ふるにしるき菊なれやなべての花は霜に枯れにき

（『公任集』・141・石の中に菊のたゞ一本残りたるを）

年の内にまた咲くなしと菊の花物思ふときは劣らざりけり

（『和泉式部続集』・Ⅱ・633・（稿者注・十月二十）四日、菊のいみじううつろひたるを、たてながら見る）

目も離れず見つゝ暮らさむ白菊の花よりほかの花しなければ

（『伊勢大輔集』・Ⅱ・42・女院の菊合に）

のように、一条朝前後よく詠まれ、殊に愛された。菊は変色が賞美されるために、衰微してから一層注目される特殊な植物である。

その鑑賞の目は菊のみに向けられるのではなく、一年で最後に咲く花という理由によって、一年間の万感を込め、惜しみながら見つめられるものであった。

この「惜しむ」という観念こそ、菊と紅葉に通底する。冬籠りを前に色の深さを増す紅葉、元稹の詩のように、一年の最後を飾る花として咲く菊は、漢詩由来の色彩美に加え、折々の景物の移り変わりに心を砕いた一年間の締めくくりとしても、とりわけ人の心に訴えるものであった。そうして一条朝前後、菊と紅葉は好んで取り上げられる。

さらにもう一例挙げておきたい。厳密には取り合わせという概念から外れるが、東三条院法華八講歌合（長保四年十月）[14]では、菊合であるにもかかわらず紅葉の歌が詠まれ、当時の菊と紅葉への一体的把握の意識が垣間見える。

（十月女院の御八講ありて、菊合騒ぎければ）

おぼつかななに、来つらん紅葉見に霧の隠さる山のふもとに

（『小大君集』・Ⅰ・8）

徳原茂実氏の「法華八講の催された邸宅の庭を山里に見立てて賞賛」[15]したものとの解釈に稿者も従いたい。菊合で紅葉を詠むことを可能にする取り合わせへの嗜好が、小大君にも、そして東三条院や周辺女房たちにも前提として存在したことを窺わせ、興味深い。

このような菊と紅葉の取り合わせ表現が、平安中期、特に一条朝を中心としたごく限られた時期、女房たちを担い手として開花する。小大君は円融帝中宮煌子と春宮時代の三条帝、馬内侍は大斎院選子と皇后定子、赤染衛門は中宮彰子に仕える女房であった。彼女たちはすべて、一条朝を中心とした時代、宮廷へ女房として出仕していたのである。現存するものだけを以て語るのは不十分ではあるものの、この状況は、当時の女房たちの好尚を示していると考えて差し支えなかろう。彼女たちは、和歌史ではほとんど例のなかった菊と紅葉の取り合わせを、おそらくは漢詩に学び、その色彩美を受け継いだ。それだけでなく、かつて『躬恒集』や『元輔集』にも見られた「惜しむ心」をそこに付与し、新たな美的表現として開花させたのである。

三、好尚の諸相と伝播

菊と紅葉への好尚は、和歌の世界に留まらない。散文では、『源氏物語』にこの取り合わせを四例確認することができる。その中でも紅葉賀・六条院行幸の菊と紅葉とは特に注目されてきた。本節ではこれまで等閑視されてきた表現の担い手という問題に焦点をあて、当該場面の表現を捉え直してみたい。

以下は紅葉賀の描写である。

木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散りすきて、顔のにほひにけおされたる心地すれば、御前

なる菊を折りて左大将さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひえならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒くこの世のことともおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと岩がくれ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものの心知るは涙落としけり。[16]

（紅葉賀・①・314～315）

様々に色付いて散ってゆく紅葉と紫に移ろう白菊が畳み掛けるように描かれ、源氏の超越的な美貌と資質を彩る。青海波を舞う源氏の挿頭は、紅葉から菊へとさしかえられて、両者の存在を一層際立たせる。この紅葉賀を物語内引用し、六条院行幸もやはり菊と紅葉を繰り返し描写する。

神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉の盛りにて、興あるべきたびの行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、院さへ渡りおはしますべければ、世にめづらしくありがたきことにて、世人も心をおどろかす。（略）山の紅葉いづ方も劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせたまふ。（略）朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。（略）主の院、菊を折らせたまひて、青海波のをりを思し出づ。

色まさるまがきの菊もをりをりに袖うちかけし秋を恋ふらし

大臣、そのをりは同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほど思し知らる。時雨、をり知り顔なり。

「むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る

時こそありけれ」と聞こえたまふ。夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見えまがふ庭の面に、容貌をかしき童べの、（略）短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭にかへり入るほど、日の暮るるもいと惜しげなり。（略）宇陀の法師の変らぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こしめす。

秋をへて時雨ふりぬる里人もかかる紅葉のをりをこそ見ね

恨めしげにぞ思したるや。帝、

世のつねの紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

と聞こえ知らせたまふ。

（藤裏葉・③・458～462）

源氏と太政大臣は菊を見て紅葉賀を懐かしみ、朱雀院と冷泉帝は紅葉賀のよすがとして紅葉を詠み交わす。菊と紅葉に割かれる描写の多さもさることながら、両者が紅葉賀を回想する装置となり、紅葉賀の象徴的存在として列席者たちの眼前に再登場するという点からも、その重要性は明らかである。

紅葉賀および六条院行幸の菊と紅葉は、行幸という場の問題と関わって、隠喩を探る試みが行われてきた。三田村雅子氏は、散

る紅葉に「「一院」の賞賛と庇護も長くはあてにできそうにないこと」を読み取り、かざしの菊を「帝の御前の禁断の花苑の「菊」にも等しい存在である藤壺との関係こそ、ここにあえて許されてかざされている」意味とする。[17] 湯浅幸代氏は、散る紅葉が「一院の庇護の衰退」、御前の菊が「盛りの時期を迎えた桐壺治世の恩恵」を意味すると論じる。[18]

しかし、次のような例はどうだろうか。

菊いとおもしろくうつろひわたりて、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれとげに見えたり。（略）男、いたくめでて、簾のもとに歩み来て、『庭の紅葉こそ踏み分けたる跡もなけれ』などねたます。菊を折りて、

『琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける

わろかめり』など言ひて……　（帚木・①・78～79）

雨夜の品定めで語られた左馬頭の体験談である。彼が「あはれとげに見えたり」と振り返る風流な邸は、「いとおもしろくうつろひわた」った「菊」と「風に競へる紅葉」によって彩られていた。女に言い寄る殿上人の言動も菊と紅葉に依拠しており、[19] 両者はこの絵画的場面における美的表現として大きく作用している。

雲林院での一齣にも、菊と紅葉が登場する。

秋の野も見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり。（略）おし明け方の月影に、法師ばらの閼伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など折り散らしたるもはかなけれど、この方の営みは、この世もつれづれならず、後の世はた頼もしげなり。　（賢木・②・116～117）

菊と紅葉は秋の景から特に切り出され、法師の供える閼伽に浮かぶ。ここでも、閼伽の水を飾る美的表現として、色彩の対照性まで含めて一体的に描かれている。

左馬頭の話も雲林院の朝も、菊と紅葉は美しい情景を描き出す。『源氏物語』が四度にもわたって描く菊と紅葉は、この取り合わせに対する紫式部の美意識を如実に表していよう。

しかし、極限まで色づいて散ってゆく紅葉と、素晴らしく移ろった菊とを取り合わせる描写は、紫式部の独創ではない。彼女を含めた宮中の女性たちが共有した好尚の発露であった。彼女は、起居した場に浸透していた流行を反映させ、『源氏物語』の菊と紅葉の描写を創りあげたのであった。『源氏物語』の第一読者として常に念頭に置かれた彰子や彰子の一家・女房たちにとって、それは流行の美的表現であり、訴求力も相当のものであったと考えられる。源氏は、宮廷の女房たちに愛された菊と紅葉に彩られ、それをかざして舞う。読者がそこに隠喩を想定する余地、想定させようとする作者の作為がどれほどあったかは疑わしい。

はじめに述べたように、歌人同士の表現の共有は珍しいことではなかった。久保木寿子氏は、和泉式部の歌ことばが、交流のあった河原院歌人や花山院周辺歌人と一致することを指摘する。[20] また、尾高直子氏は、和泉式部の歌語に花山院サロンの影響、また寛弘期の彰子サロンの影響を見、[21]「当時勅撰集にとられないよ

うな個人的な歌は非常に狭い範囲で影響関係を持っていたということが推測できる」とした。

諸氏の論は、いずれも歌ことばの生成と伝播を捉える際に有益である。ただし、従来指摘されてきたのが「非常に狭い範囲」、つまり直接的かつ密接な交友を前提とするのに対し、菊と紅葉の取り合わせは、それよりもさらに広い範囲で起こっている。ほぼ同時期に宮廷に仕えたとはいえ、仕える主人を異にし、年齢にも幅がある。斎院周辺で詠まれた歌もある。もちろん個人的な交流を結んだ者もあろうが、『古今和歌集』撰者や河原院歌人という和歌の共同体、花山院や彰子を戴く連帯意識を核とした集団とは性質を異にする。単なる伝播というには詠者が限定されすぎており、交友に基づく影響というにはあまりにも広範に歌が残る。

菊と紅葉の取り合わせをめぐる表現共有の在り方には、なお検討の必要があろう。しかし、その一因として、この取り合わせへの好尚が和歌に限定されず、以下のようにさまざまな所へ及んでいたことも関係するのではないか。『小大君集』の「いたく荒れたる人の家に、紅葉散りて、人もおさ〳〵なきに菊おもしろう立てり、女ながめたるに」という詞書が示すように、当時の屏風絵には、菊と紅葉を主要な題材とするものが描かれた。また、赤染衛門が正編作者に擬せられる『栄花物語』は、衣装描写として紅葉襲と菊襲を対比的に幾度も用いている。

御方々の女房こぼれ出でたるなりども、千歳の籬の菊を匂はし、四方の山の紅葉の錦を裁ち重ね、すべてまねぶべきにあらず。[22]

（巻第二十　御賀・②・363）

菊と紅葉の取り合わせは、和歌・物語・絵画・衣装描写など文化全般に及ぶ。先述の歌ことばの伝播が、直接贈答を交わす二者の間でしか起こらないのに対し、菊と紅葉の取り合わせの伝播経路は、贈答にも、和歌にすら限定されない。新奇な歌ことばではなく、馴染みの深い景物同士の取り合わせであり、視覚的要素の強かったことが、広い範囲への浸透を可能にしたのであろう。漢詩由来の菊と紅葉の取り合わせは当時の女房の間で共有され、その具体的な表出として、和歌・絵画・衣装描写・『源氏物語』が生まれてゆく。

四、『源氏物語』を介して

これほど女房たちに愛好された菊と紅葉の取り合わせも、彼女たちと共に姿を消す。『狭衣物語』は菊・紅葉・竜胆を用いて衣装などを描くが、それは菊と紅葉への愛好に裏打ちされるのではなく、秋の色彩を集めて見せるもので、一条朝の好尚からは既に遠い。[23]

わずかに『定頼集』は以下の歌を載せる。

五条の尼上の御もとに君たち渡り給て、菊のうつろひたる、紅葉のたゞ一葉つきたるを奉りたりければ

我のみやかゝると思へばふるさとに籬の菊もうつろひにけり

このもとを思こそやれもみぢ葉の枝にすくなき色を見るかな

（『定頼集』・I・73・74）

定頼の娘たちが、祖母である公任室の邸へ行ったときの歌である。ただし、これは定家筆本系統の本文で、明王院本系統では以下のように衣装描写となっている。

尼上の御もとに、五条に姫君たちの渡り給へるに、若君は菊のうつろひ、姫君はたゞひとへ着たる紅葉を着たまひたりければ、尼上の御もとに　（『定頼集』・Ⅱ・398番歌詞書）

ここは他撰部分で、一首目の第二句「かゝると思へば」は「着たると思へば」となっている。詞書の対立から、うつろった菊と紅葉の進呈があったのか、娘たちの衣装を言うのか、明らかではない。詠歌年も定かではないが、長女の結婚が長元八（1035）年であるから、下限をここにして一〇三〇年前後の歌であろう。

また、一条朝から数十年後、ある歌合か歌会かで「落葉埋菊」という題が出た。家経と範永の歌が残っている。

落葉埋菊

もみぢ葉のほかより高くつもれるや菊の咲けりし所なる覧　（『家経集』・75）

落葉、菊を埋む

散りぬべき花みる春を忘るゝは紅葉を着たる菊にぞありける　（『範永集』・30）

菊と紅葉を同時には詠むものの、菊は散りつもった紅葉に覆われ、その色合いは隠されている。一条朝で賞美された色彩の美はすでにない。題からしても、和歌よりは漢詩の影響が強いのであろう。一条朝女房たちの後これらばかりを残して、菊と紅葉の取り合わせは、平安末期に至るまでついに一首も見られない。

しかし、一条朝以降の長い空白期を経て、菊と紅葉の取り合わせは再び和歌史に姿を現す。それは、約二百年後、新古今時代のことであった。

（水無瀬川摂津）　家隆朝臣

山風のよそにもみぢは水無瀬川せきいるる宿の庭の白菊[24]　（『最勝四天王院和歌』・137）

（秋廿首）

契ありてうつろはんとや白菊の紅葉の下の花に咲きけん[25]　（『拾遺愚草』・後鳥羽院百首・1352）

籬有残花纔紫菊、林無黄葉只青松

色〳〵に菊も紅葉もうつろへど春のまゝなる庭の若松　（『拾遺愚草員外』・3646）

（橋本社に詠みて奉り侍し、秋十五首歌）

散りつもる紅葉色こき庭の面にをのれまぎれぬ白菊の花　（『光経集』・128）

ところで、和歌で植物同士を取り合わせることは存外に難しい。一条朝前後には、まず菊と紅葉に対する好尚があり、そこから和歌へ派生していったため、自然に取り合わせが達成された。好尚を共有した人々が離散すると途端に絶えてしまったのは、核となり前提となる好尚なくして取り合わせることが困難であったからであろう。それがなぜ、二百年の時を経て再び取り合わせられるようになるのか。漢詩での伝統は依然続いていたとはいえ、和歌

での菊と紅葉の取り合わせは忘れ去られて久しかった。しかも、新古今時代という極めて限られた時期に同時多発的に詠まれ、すぐ後には再び絶えてしまう。[26] やはり、菊と紅葉の取り合わせは、基本的に和歌には馴染まないらしい。

如上の状況を考えると、この頃、菊と紅葉の取り合わせが和歌の世界だけを基盤として発生する蓋然性は低い。定家・家隆・光経という詠者の顔ぶれからも、何らかの共通する文化的背景を考えたほうが穏当であろう。そこに、当時盛んであった源氏取りの手法を読み取るのは無理な推論ではあるまい。周知のように、彼らは源氏取りに意欲的であった。取り合わせる景物の選択という点で、『源氏物語』の、特に紅葉賀や六条院行幸といった作中屈指の場面が彼らに与えた影響は大きかったと推測される。詳しくは後稿を期すが、一条朝女房の好尚を『源氏物語』が留めたことにより、院政期それを繰り返し味読する人々の感性に深く浸透することによって、和歌史へと再び姿を現した可能性が想定されよう。

おわりに

菊と紅葉は、一条朝前後、女房たちにいたく愛好された。取り合わせ自体は早く漢詩において確立されており、そこからの影響が想定される。漢詩の鮮やかな色彩表現を取り入れ、彼女たちはさらに一年最後の惜しむべき景物としての性質を積極的に見出した。好尚は和歌・物語・絵画・衣装描写など、文化全般に及ぶものであった。

一条朝前後の女房の菊と紅葉に対する好尚は、彼女たちが集う場の消滅と共に、一旦は潰える。しかし、時代に消えてゆく流行の好尚を、『源氏物語』は作中でも屈指の印象的な場面に留めた。それが新古今時代、『源氏物語』を詠歌に取り入れようとした人々によって再発見され、源氏取りの高まりと共に蘇る。紅葉賀そして六条院行幸の圧倒的な描写が、困難な取り合わせを再び実現させるのである。かつては好尚の発露の一端でしかなかった『源氏物語』の菊と紅葉は、それを繰り返し味読する人々の感性に深く浸透することによって、和歌史へと再び姿を現してゆく。

しかし、一条朝前後の菊・紅葉と、新古今時代の菊・紅葉とは、意味合いを全く異にしている。本稿で述べてきた通り、この取り合わせは、同時代的傾向や表現の担い手、享受層など、表現を取り巻く文化的状況を考え併せるべき表現であった。和歌史だけでは、一条朝においてこの好尚がもたらした広範な影響が浮かび上がらず、新古今時代の詠歌背景も覆い隠されてしまう。物語は時として和歌と表現を一にすることがあり、和歌表現をめぐる当時の意識を知る上での大きな可能性を秘めていることを、菊と紅葉の取り合わせ表現は示している。

注

（1）片桐洋一「古今集歌壇と歌語」（『和歌文学の世界　論集　古今和歌集』笠間書院　昭和56年）

(2) 久保木寿子、尾高直子など。
(3) 後藤昭雄「漢詩文と和歌――延喜七年大井河御幸詩について――」(『和歌文学の世界　論集　和歌とは何か』昭和59年)
(4) 『日本古典文学大系　古今著聞集』(岩波書店　昭和41年)、巻第十四「亭子院御時大堰川行幸に紀貫之和歌の仮名序を書く事」
(5) 片桐洋一『伊勢物語全読解』(和泉書院　平成25年)によると、第二期にあたる。
(6) 『新編日本古典文学全集　竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』(小学館　平成6年)
(7) 私家集の引用は、『新編私家集大成』による。なお、私に漢字をあて、濁点などを附した。
(8) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』(藝林舎　昭和52年)。訓点等を私に改めた。
(9) 対句表現など、菊と紅葉が同等の景物として強い関連性をもって表現される例。重陽宴での風景に紅葉が点描されること自体は、「葉帯紅而去枝」(『経国集』・菅清公・重陽節神泉苑賦秋可哀応制)など早くからあった。
(10) 『新訂増補　国史大系』(吉川弘文館　昭和40年)。私に校訂したところがある。
(11) 『群書類従　第九輯』(続群書類従完成会　昭和3年)。『石川県立図書館蔵　川口文庫善本影印叢書3　江吏部集・無題詩』(勉誠出版　平成22年)で校合したが、異同は見られなかった。
(12) これ以前の漢詩は、「翠」や「青」の苔の上に落ちた紅葉を好んで描写する。一方、和歌では紅葉の紅に焦点が当てられ、他の色と対比されることは稀である。
(13) 湯浅幸代「朱雀院行幸の舞人・光源氏の菊の「かざし」――紅葉と菊の「かざし」の特性、及び対照性から――」(『日本文学』56-9号　平成19年9月)
(14) 名称は徳原茂実「東三条院法華八講歌合をめぐって」(『日本語日本文学論叢』7号　平成24年3月)による。
(15) 『和歌文学大系　三十六歌仙集(二)』(明治書院　平成24年)
(16) 『新編日本古典文学全集　源氏物語』(小学館　平成6～10年)。傍線などは稿者により、以下同様とする。
(17) 三田村雅子「紅葉の蔭」(『源氏物語――物語空間を読む』、筑摩書房　平成9年)
(18) 湯浅氏前掲論文(13)
(19) 殿上人の歌「月もえならぬ」を、「菊もえならぬ」とする本もあり、清水婦久子氏も、和歌技法の面から、菊の本文を排除すべきでないとされる。「源氏物語の和歌――縁語・掛詞の重要性――」(『源氏物語の風景と和歌　増補版』和泉書院　平成20年、初出『文学』平成18年9・10月号)による。
(20) 久保木寿子「和泉式部の詠歌環境――その始発期――」(『国文学研究』71号　昭和55年6月)
(21) 尾高直子「和泉式部続集「日次歌群」の詠歌事情――花山院御製「大堰河行幸和歌」との影響関係から――」(『人間文化研究年報』26号　平成15年3月)、同「和泉式部続集「日次歌群」の表現――歌語「みどりの紙」「風の音」から――」(『和歌文学研究』89号　平成16年12月)
(22) 『新編日本古典文学全集　栄花物語②』(小学館　平成9年)
(23) 「御几帳の帷ども、菊の織物にて、咲ける簾と見えたるに、女房の袖口ども、紅葉襲の擣ちたるどもに、同じ色の二重織物の表着、竜胆の唐衣の、地は薄きに、紋はいと濃く織り浮かされたる、夜目は外の色にも似ず、なべてならず、清らなり。」(『新編日本古典文学全集　狭衣物語』・巻三・188～189)
(24) 水無瀬川は菊との関連性が弱いにもかかわらず、最勝四天王院和歌では、水無瀬川題の八首中七首が菊を読み込む。渡邉裕美子

氏（『最勝四天王院障子和歌全釈』風間書房　平成19年）は菊が名所撰定過程であらかじめ定められた景物であったとする。菊への対比として紅葉を配する発想に注目したい。

(25)　今井明氏は、定家の「ちぎりありて」歌に『万葉集』「是山黄葉下　花矣我　小端見　反恋」（巻七・1306）の影響を指摘される（「『五代簡要』と定家の詠作――建保期の定家歌・補説――」（『香椎潟』44号　平成11年3月）。具体的な歌句はこれに拠ったのであろうが、「花」を「菊」に詠みかえたところに『源氏物語』の受容を見たい。管見の限り、ここに挙げた四首に他の影響を指摘するものは見当たらない。

(26)　次に菊と紅葉の取り合わせを見るには、さらに数十年～一世紀の期間を要する。京極派歌人たちに好まれたらしく、伏見院主催の二十番歌合や『玉葉和歌集』に採られている。

〈付記〉本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の成果の一部である。

（かわらい・ゆうこ／本学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）